

## 2 四類感染症の発生動向

### 1) 四類感染症の患者情報

2024 年の埼玉県及び全国の四類感染症の届出数を表 I -2-1 に示した。

表 I -2-1 四類感染症の届出数（2024 年）

疾 患 名		埼 玉 県	全 国*
四 類	E型肝炎	39	527
	ウエストナイル熱(ウエストナイル脳炎含む)	-	-
	A型肝炎	4	137
	エキノкокクス症	-	20
	エムボックス	-	19
	黄熱	-	-
	オウム病	-	4
	オムスク出血熱	-	-
	回帰熱	-	11
	キャサヌル森林病	-	-
	Q熱	-	6
	狂犬病	-	-
	コクシジオイデス症	-	4
	ジカウイルス感染症	-	4
	重症熱性血小板減少症候群(SFTS)	-	122
	腎症候性出血熱 (HFRS)	-	-
	西部ウマ脳炎	-	-
	ダニ媒介脳炎	-	2
	炭疽	-	-
	チクングニア熱	-	10
	つつが虫病	3	354
	デング熱	11	230
	東部ウマ脳炎	-	-
	鳥インフルエンザ(H5N1 及び H7N9 を除く)	-	-
	ニパウイルス感染症	-	-
	日本紅斑熱	1	523
	日本脳炎	1	9
	ハンタウイルス肺症候群 (HPS)	-	-
	Bウイルス病	-	-
	鼻疽	-	-
	ブルセラ症	1	5
	ベネズエラウマ脳炎	-	-
	ヘンドラウイルス感染症	-	-
	発しんチフス	-	-
	ポツリヌス症	-	7
	マラリア	3	44
	野兔病	-	-
	ライム病	1	25
	リッサウイルス感染症	-	-
	リフトバレー熱	-	-
	類鼻疽	1	2
	レジオネラ症	141	2,428
	レプトスピラ症	1	53
	ロッキー山紅斑熱	-	-

\*全国は診断週(1～52週)の集計値

(-:0)

埼玉県に届出のあった四類感染症は、E型肝炎 39 人、A型肝炎 4 人、つつが虫病 3 人、デング熱 11 人、日本紅斑熱 1 人、日本脳炎 1 人、ブルセラ症 1 人、マラリア 3 人、ライム病 1 人、類鼻疽 1 人、レジオネラ症 141 人、レプトスピラ症 1 人の計 207 人であった。

## ア E型肝炎

男性 31 人、女性 8 人の計 39 人の届出があり、前年の 43 人を下回った(図 I-2-1)。症例の年齢は 30 歳代から 80 歳代に分布し、50 歳代及び 60 歳代が各 12 人で多かった(表 I-2-2)。類型は患者が 37 人、無症状病原体保有者が 2 人で、診断方法は血清 IgA 抗体の検出のみが 21 人、検体から直接の PCR 法による病原体遺伝子の検出及び血清 IgA 抗体の検出が 15 人、検体から直接の PCR 法による病原体遺伝子の検出のみが 2 人、検体から直接の PCR 法による病原体遺伝子の検出及び血清 IgM 抗体の検出が 1 人であった。推定感染経路は経口感染 16 人、不明 23 人で、推定感染地域は国内 29 人、不明 10 人であった。届出は年間を通して確認され、無症状病原体保有者の 2 人のうち 1 人は献血により探知された症例であった。

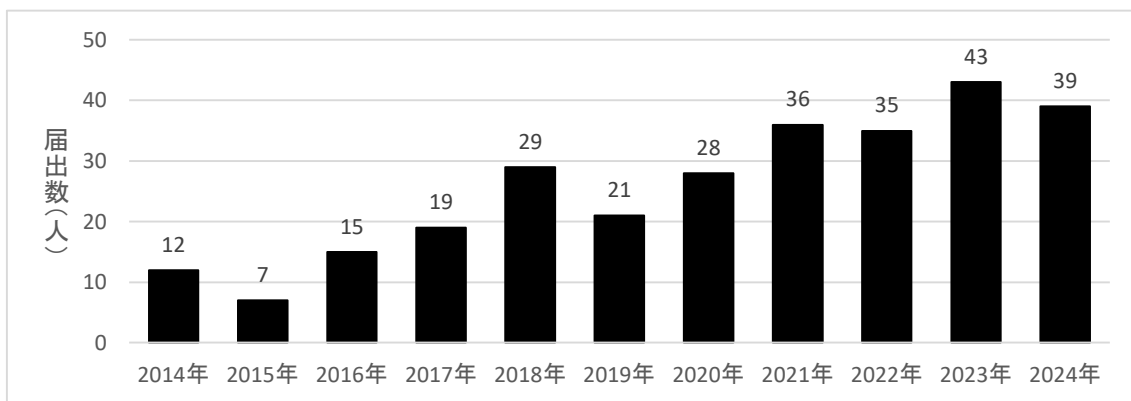


図 I-2-1 E型肝炎 届出数(2014 年～2024 年)

表 I-2-2 E型肝炎 年齢階級別届出数

年齢階級	総数	男性	女性
10歳未満	—	—	—
10歳代	—	—	—
20歳代	—	—	—
30歳代	2	1	1
40歳代	4	4	—
50歳代	12	10	2
60歳代	12	9	3
70歳代	6	6	—
80歳代	3	1	2
90歳以上	—	—	—
合計	39	31	8
割合	100.0%	79.5%	20.5%

(—:0)

## イ A型肝炎

男性 2 人、女性 2 人の計 4 人(前年 3 人)の届出があった(図 I-2-2)。症例の年齢は 20 歳代、50 歳代、60 歳代及び 80 歳代が各 1 人で、全症例で類型は患者であった。診断方法は血清 IgM 抗体の検出のみが 3 人、検体から直接の PCR 法による病原体遺伝子の検出及び血清 IgM 抗体の検出が 1 人であった。推定感染経路は、経口感染が 2 人、不明が 2 人で、推定感染地域は国内が 3 人、不明が 1 人であった。また、ワクチン接種歴は、無しが 3 人、不明が 1 人であった(表 I-2-3)。

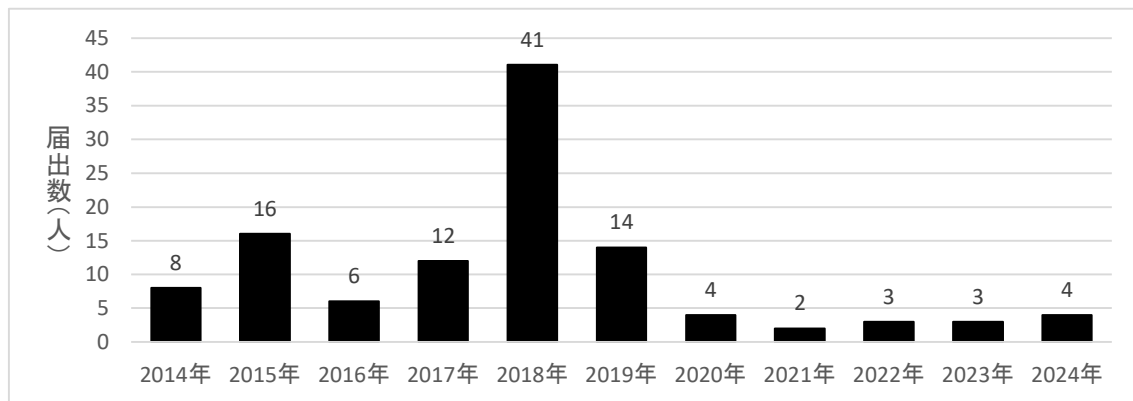


図 I-2-2 A型肝炎 届出数 (2014 年～2024 年)

表 I-2-3 A型肝炎(n=4)の届出内容

診断日	性別	年齢	診断方法	推定感染経路	推定感染地域	ワクチン接種歴
2/22	女	60歳代	血清IgM抗体の検出	経口感染	国内	無
2/28	男	80歳代	血清IgM抗体の検出	経口感染	不明	無
4/19	女	50歳代	血清IgM抗体の検出	不明	国内	不明
5/23	男	20歳代	検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出 血清IgM抗体の検出	不明	国内	無

## ウ つつが虫病

11 月に 50 歳代の男性 2 人、12 月に 50 歳代の男性 1 人の計 3 人の届出があり、前年と同数であった(図 I-2-3)。診断方法は、検体から直接の PCR 法による病原体遺伝子の検出及び間接蛍光抗体法又は間接免疫ペルオキシダーゼ法による血清 IgM 抗体の検出が 1 人、検体から直接の PCR 法による病原体遺伝子の検出のみが 1 人、間接蛍光抗体法又は間接免疫ペルオキシダーゼ法による血清 IgM 抗体の検出のみが 1 人であった。推定感染地域はすべて国内(県外)であった。

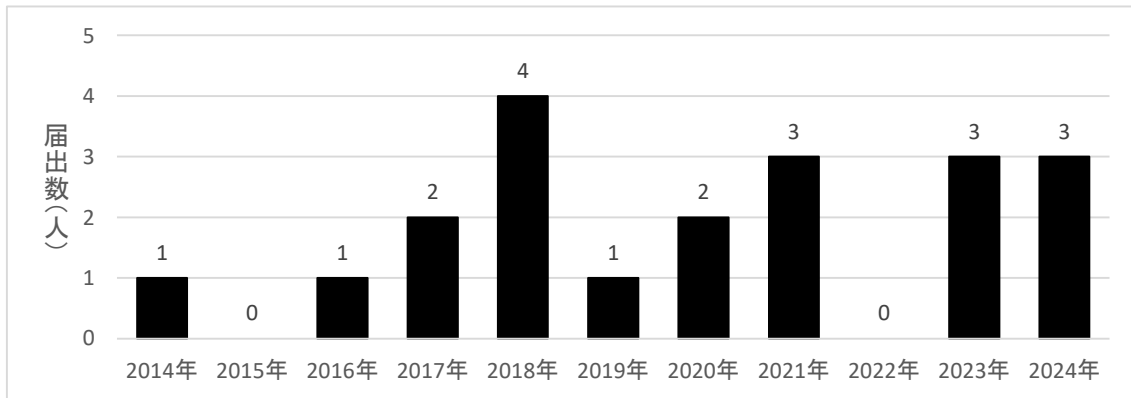


図 I-2-3 つつが虫病 届出数(2014 年～2024 年)

## エ デング熱

男性 8 人、女性 3 人の計 11 人の届出があり、前年の 9 人を上回った(図 I-2-4)。病型は全症例でデング熱であり、症例の年齢は 9 歳から 40 歳代に分布した。診断方法は、血液(血清又は全血)での非構造蛋白抗原(NS1)の検出のみが 5 人、検体から直接の PCR 法による病原体遺伝子の検出のみが 4 人、血液(血清又は全血)での非構造蛋白抗原(NS1)の検出及び検体から直接の PCR 法による病原体遺伝子の検出が 2 人であった。推定感染地域は全症例が国外であり、インドネシア及びフィリピンが各 3 人、アラブ首長国連邦、インド及びスリランカが各 1 人、複数の感染地域が推定される者として、インドネシア又はマレーシア、インドネシア又はフィリピンが各 1 人であった(表 I-2-4)。

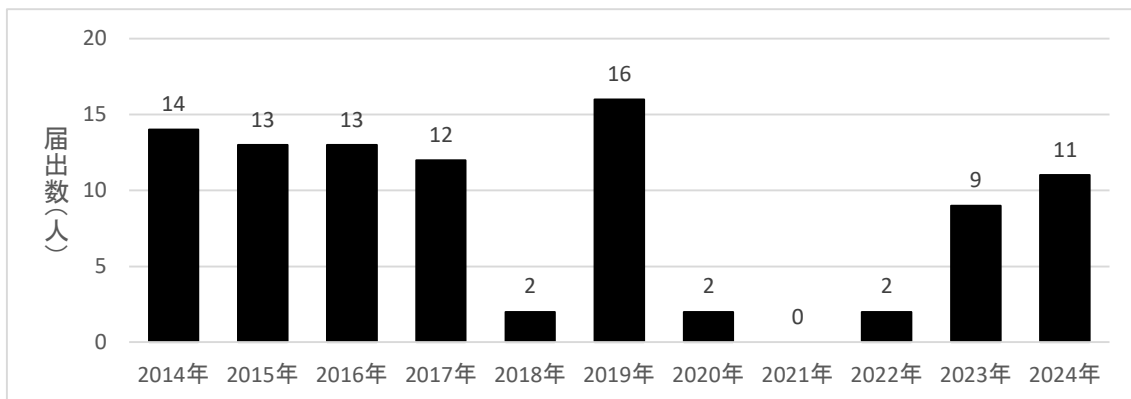


図 I-2-4 デング熱 届出数 (2014 年～2024 年)

表 I-2-4 デング熱(n=11)の届出内容

診断日	性別	年齢	診断方法	推定感染地域
1/12	女	40歳代	検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出	スリランカ
3/16	男	20歳代	血液(血清又は全血)での非構造蛋白抗原(NS1)の検出 検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出	インドネシア、マレーシア
4/6	男	10歳未満	血液(血清又は全血)での非構造蛋白抗原(NS1)の検出	インドネシア
6/6	男	20歳代	検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出	インドネシア
6/6	男	20歳代	血液(血清又は全血)での非構造蛋白抗原(NS1)の検出	アラブ首長国連邦
8/21	男	10歳代	血液(血清又は全血)での非構造蛋白抗原(NS1)の検出	フィリピン
8/30	男	20歳代	血液(血清又は全血)での非構造蛋白抗原(NS1)の検出 検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出	インドネシア、フィリピン
9/6	女	30歳代	検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出	インドネシア
9/9	男	20歳代	検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出	フィリピン
9/9	女	20歳代	血液(血清又は全血)での非構造蛋白抗原(NS1)の検出	フィリピン
9/27	男	20歳代	血液(血清又は全血)での非構造蛋白抗原(NS1)の検出	インド

## オ 日本紅斑熱

2020 年以降届出がなかった日本紅斑熱は、1 月に 50 歳代男性 1 人の届出があった。診断方法は、検体から直接の PCR 法による病原体遺伝子の検出及び間接蛍光抗体法又は間接免疫ペルオキシダーゼ法によるペア血清での抗体価の有意上昇であった。推定感染原因は動物・蚊・昆虫等からの感染で、推定感染地域は国内(県外)であった。

## カ 日本脳炎

10 月に 60 歳代女性 1 人の届出があり、埼玉県としては感染症法の施行(1999 年)以降、初の届出となった。類型は患者で、診断方法はペア血清での赤血球凝集阻止抗体の検出であった。推定感染原因は動物・蚊・昆虫等からの感染で、推定感染地域は国内(詳細不明)であった。

## キ ブルセラ症

2018 年以降届出がなかったブルセラ症は、6 月に 50 歳代女性 1 人の届出があった。診断方法は、分離・同定による病原体の検出であり、推定感染地域は中華人民共和国であった。

## ク マラリア

6月に50歳代の男性、7月に30歳代の男性、9月に30歳代の男性の計3人(前年2人)の届出があった(図I-2-5)。病型は熱帯熱が2人、三日熱が1人であった。診断方法は、血液検体の鏡検による病原体の検出及び血液検体の核酸増幅法による病原体遺伝子の検出が2人、血液検体の鏡検による病原体の検出のみが1人であった。推定感染地域はギニア、ナイジェリア及びパキスタンが各1人であった。

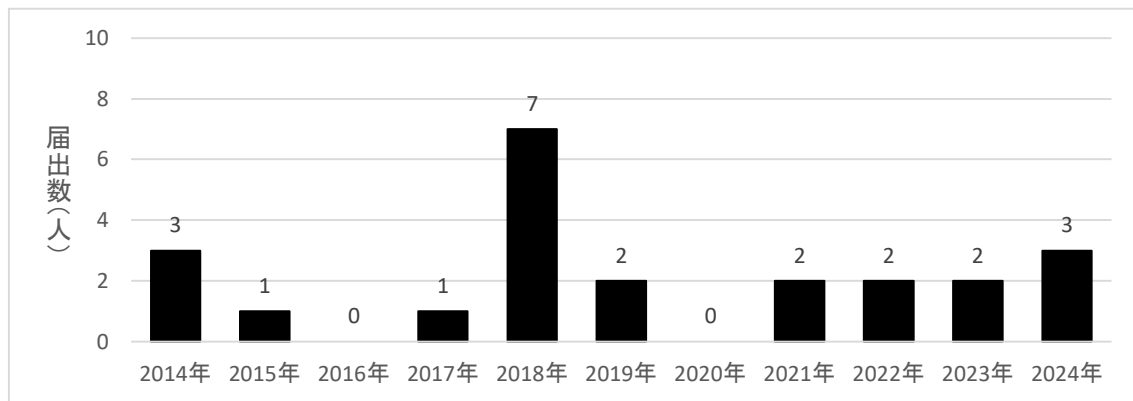


図 I-2-5 マラリア 届出数 (2014 年～2024 年)

表 I-2-5 マラリア (n=3) の届出内容

診断月	性別	年齢	病型	診断方法	推定感染地域
6月	男	50歳代	熱帯熱	血液検体の鏡検による病原体の検出	ナイジェリア
7月	男	30歳代	熱帯熱	血液検体の鏡検による病原体の検出 血液検体の核酸増幅法による病原体遺伝子の検出	ギニア
9月	男	30歳代	三日熱	血液検体の鏡検による病原体の検出 血液検体の核酸増幅法による病原体遺伝子の検出	パキスタン

## ケ ライム病

過去10年で2人(2014年及び2023年で各1人)の届出があったライム病は、5月に30歳代の女性1人の報告があった。診断方法は検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出及びWestern Blot法による血清抗体の検出で、推定感染地域はルーマニアであった。

## コ 類鼻疽

2020年以降届出がなかった類鼻疽は、7月に50歳代の男性1人の報告があった。診断方法は分離・同定による病原体の検出及び検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出で、検体はいずれも喀痰及び血液であった。推定感染原因は塵埃感染で、推定感染地域はベトナムであった。

## サ レジオネラ症

男性 116 人、女性 25 人の計 141 人の届出があり、前年の 112 人と比較して増加した。症例の年齢は 40 歳代から 90 歳代に分布し、80 歳代が 36 人、70 歳代が 35 人、60 歳代が 33 人の順で多かった。類型は患者 139 人、無症状病原体保有者 2 人で、患者の病型別では肺炎型 133 人、ポンティアック熱型 6 人であった(表 I-2-6、図 I-2-6)。

年間を通して届出はあったが、7 月が 18 人と最も多く、9 月～12 月にかけても例年に比べやや多い状況が続いた(図 I-2-7)。

診断方法は、酵素抗体法又はイムノクロマト法による尿中の病原体抗原の検出が 137 人、検体から直接の病原遺伝子の検出が 27 人、分離・同定による病原体の検出が 19 人であった(重複例有り)。推定感染地域は、国内 127 人、国外 4 人、不明 10 人で、国内感染例のうち県内は 91 人であった。

表 I-2-6 レジオネラ症 年齢階級別届出数

年齢階級	総数	割合	男性	女性
10歳未満	—	0.0%	—	—
10歳代	—	0.0%	—	—
20歳代	—	0.0%	—	—
30歳代	—	0.0%	—	—
40歳代	5	3.5%	4	1
50歳代	23	16.3%	23	—
60歳代	33	23.4%	27	6
70歳代	35	24.8%	31	4
80歳代	36	25.5%	25	11
90歳以上	9	6.4%	6	3
合計	141	100.0%	116	25
割合	100.0%		82.3%	17.7%

(—:0)

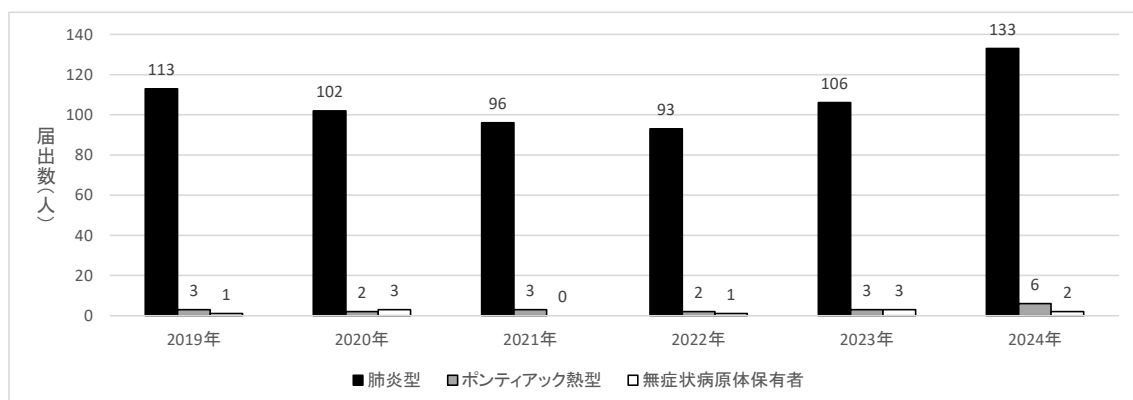


図 I-2-6 レジオネラ症 病型別届出数 (2019 年～2024 年)

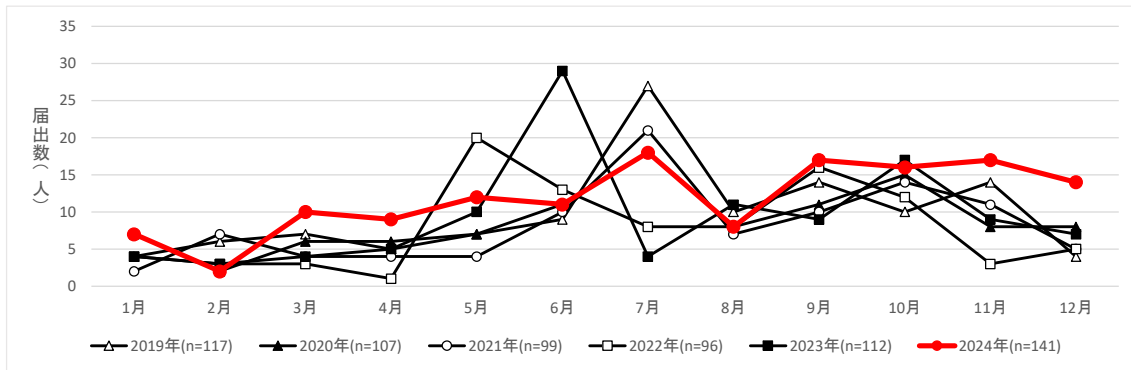


図 I-2-7 レジオネラ症 月別届出数 (2019 年～2024 年)

## シ レプトスピラ症

2022 年以降届出のなかったレプトスピラ症は、9 月に 70 歳代の男性 1 人の届出があった。診断方法は、検体からの直接の PCR 法による病原体遺伝子の検出及びペア血清での顕微鏡下凝集試験法(MAT)による血清抗体の検出であった。推定感染経路は水系感染又は動物・蚊・昆虫等からの感染で、推定感染地域は国内(詳細不明)であった。

## 2) 四類感染症の病原体検出状況

### ア E型肝炎

23 例 25 検体が採取され、17 例 18 検体から E 型肝炎ウイルスが検出された(表 I-2-7)。遺伝子型は、G3 が 12 例、型別未確定が 5 例であった。ウイルスが検出された全症例に海外渡航歴は確認されなかった。

### イ A型肝炎

1 例 3 検体が採取されたが、A 型肝炎ウイルスは検出されなかった(表 I-2-7)。

### ウ エムボックス

1 例 1 検体が採取されたが、エムボックスウイルスは検出されなかった(表 I-2-7)。

### エ 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)

1 例 1 検体が採取されたが、SFTS ウイルスは検出されなかった(表 I-2-7)。

### オ つつが虫病

11 月及び 12 月に採取された 2 例 2 検体からつつが虫病リケッチア(*Orientia tsutsugamushi*) 遺伝子が検出された。

### カ デング熱

14 例 17 検体が採取され、デングウイルスが検出されたのは 6 例 7 検体で、こ



の他の 2 例 2 検体から非構造蛋白抗原(NS1)が検出された(表 I-2-7)。デングウイルスの遺伝子型は 3 型が 3 例、2 型が 2 例、1 型が 1 例であった。全症例で東南アジア方面への渡航歴があった。

表 I-2-7 四類全数把握対象疾患のウイルス検出状況 (2024 年)

臨床診断名	ウイルス	採取月別検体数												累計	その他のウイルス
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
E型肝炎	検体数	5	4		3	3	2	2	2	1		2	1	25	
	E型肝炎	3	3		3	2	2	2	1	1		1		18	
A型肝炎	検体数		3											3	
	A型肝炎														
エムボックス	検体数	1												1	
	エムボックス														
重症熱性血小板減少症候群	検体数									1				1	
	SFTS														
デング熱	検体数	2		2	3		2		2	5		1		17	
	デング	1		1			2			5				9	

キ ブルセラ症

6 月に採取された 1 検体から *Brucella melitensis* が検出された。患者は中華人民共和国への渡航歴があった。

ク ライム病

5 月に採取された 1 検体からボレリア (*Borrelia afzelii*) 遺伝子が検出された。患者はルーマニアへの渡航歴があった。

ケ 類鼻疽

6 月に採取された 1 検体から *Burkholderia pseudomallei* が検出された。患者はベトナムへの渡航歴があった。

コ レジオネラ症

埼玉県内で分離された *Legionella pneumophila* は 19 症例 20 株であった。血清群(SG)の内訳は、SG1 が 17 株で最も多く、SG3 が 2 株、SG2 が 1 株であった。1 症例は *L. pneumophila* SG2 及び SG3 が同時に検出された。また、菌は分離できなかったが LAMP 法で陽性を示したものが 13 件、PCR 法で *L. pneumophila* を示したものが 1 件あった(表 I-2-8)。

表 I-2-8 レジオネラ症 病原体分離状況 (2024 年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
<i>Legionella pneumophila</i> SG1	-	-	3	-	3	-	1	2	2	2	2	2	17
<i>Legionella pneumophila</i> SG2	-	-	-	-	-	-	-	-	1*	-	-	-	1
<i>Legionella pneumophila</i> SG3	-	-	-	-	-	-	-	-	2*	-	-	-	2
<i>Legionella</i> spp.(LAMP陽性)	1	-	-	-	-	-	7	1	2	1	-	1	13
<i>Legionella pneumophila</i> (PCR陽性)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
計	1	-	3	-	3	-	9	3	7	3	2	3	34

\*: 1 症例から 2 つの血清群が検出された例を含む

サ レプトスピラ症

9 月に採取された 1 検体から *Leptospira interrogans* が検出された。血清群は Autumnalis であった。